宮城県文化財調査報告書第 142 集

藤田新田遺跡

仙台東道路建設関係遺跡調査概報

平成 3 年 3 月

宮城県教育委員会
日本道路公団

序　　文

今回の仙台市藤田新田遺跡の調査は、宮城県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した仙台東道路の建設に伴う遺跡の確認調査です。

仙台東道路は、亘理町中泉から仙台市・利府町・鳴瀬町・石巻市などを経て桃生町太田に至る仙台湾高規格幹線道路の一部で、亘理町の一般国道６号線から仙台市宮城野区中野の一般国道45号線までの延長約26.3㎞の路線であります。この道路は、東北地方の重要な幹線である一般国道 4・6・45 号が、仙台都市圏で年々増大する交通需要と沿線の都市開発の進行により発生している恒常的な交通混雑を解消すると共に、仙塩道路や松島有料道路などと一体となり、仙台湾岸地域の幹線道路として機能することを目的として計画されたものです。

藤田新田遺跡は仙台平野の浜堤上に立地する弥生時代の集落跡で、計画案が示された段階では、周知の埋蔵文化財包蔵地としての範囲は、仙台東道路のルートから外れていました。しかし、遺跡から延びる微高地が路線敷部分まで達しており、遺跡の範囲が広がる可能性があったため、平成元年10月にこの部分の試掘調査を行いました。その結果、古墳時代の竪穴住居跡などが発見され、遺跡が路線敷部分まで延びていることが分かりました。そこで、今年度は遺跡の範囲や遺構の数などを正確に把握するための確認調査をしたものです。

本書はその発掘調査の概要をまとめたものです。速報として活用していただければ幸いです。

最後に、調査に際して種々ご協力頂きました日本道路公団をはじめとする工事関係各位、および直接発掘作業にあたられた方々に対して厚く感謝の意を表する次第です。

平成３年３月

宮城県教育委員会 教育長　　大立目　謙 直

例　　言

１．本書は日本道路公団仙台建設局が担当する仙台東道路建設計画に伴う藤田新田遺跡の調査概報である。

２．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

３．本書における土色についての記述には『新版標準土色帳』(1973年)を利用した。

４．本書の第１図は建設省国土地理院発行の1/25,000「仙台東南部」を複製して使用した。

５．本書は調査員全員の協議を経て、Ⅰ章を白鳥鳥一、Ⅱ～Ⅵ章を真山悟が執筆した。

６．出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会で保管している。

-

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 2
Ⅲ．調査の方法と経過 …… 4
Ⅳ．調査の概要 …… 6
　第１号住居跡 …… 6
　第２号住居跡 …… 11
　第１号円形周溝 …… 12
　第１号土壙 …… 12
　第２号土壙 …… 12
　第３号土壙 …… 13
　第１号土器集中遺構 …… 14
　第３号土壙その他の出土遺物 …… 17
Ⅴ．考　察 …… 18
Ⅵ．まとめ …… 23

調 査 要 項

遺　跡　名：藤田新田遺跡(宮城県遺跡地名表発載番号01028)
遺 跡 記 号：ＮＥ
遺跡所在地：仙台市若林区荒井字藤田新田
発 掘 面 積：8,600㎡
調 査 期 間：平成２年５月７日～６月14日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：白鳥良一、真山悟、須田良平、近藤和夫、岩見和泰

Ⅰ．調査に至る経過

仙台東道路は、亘理町中泉を起点とし、岩沼市・名取市・仙台市・多賀城市・利府町・松島町・鳴瀬町・矢本町・石巻市・河南町・河北町を経て桃生町太田を終点とする仙台湾高規格幹線道路の一部で、亘理町の一般道路６号線から仙台市宮城野区中野の一般国道45号線までの延長約26.3mの路線である。この道路は仙台市内の通過交通を分離して現道の機能回復を図るとともに、宮城県・仙台市などが国際化を進めている仙台空港、仙台新港の連絡道路として、仙台都市圏の発展に寄与しようとするものである。このうち、仙台空港I.Cから仙台東I.Cまでの約14.1㎞の区間は日本道路公団が４車線の一般有料道路事業として施行することになった。

昭和56年12月に示された計画案によると、その時点での周知の埋蔵文化財包蔵地は避けられていた。しかし、ルートが阿武隈川と名取川の河口にひらけた仙台沖積平野を南北に通過するものであることから、自然堤防や浜堤部分には遺跡が存在する可能性があり、改めて詳細な分布調査を実施する必要がある旨を申し入れた。

昭和63年11月に日本道路公団仙台建設局仙台工事事務所長から仙台東道路の建設計画と文化財のかかわりについての正式協議がなされたのを受けて、県教育委員会は仙台市教育委員会、名取市教育委員会、岩沼市教育委員会、亘理町教育委員会と共に平成元年３月に路線敷の詳細な分布調査を行った。その結果、微高地上に位置する仙台市下在家地区、同藤田新田地区、名取市大曲地区、同鶴巻前地区、同六角地区、同耕谷地区において遺物の散布が認められたほか、やはり微高地となっている仙台市下飯田地区、名取市雲南山地区、岩沼市浦条地区にも遺跡が存在する可能姓があり、さらに低湿地部分でも水田遺構が発見されることが予想されるため、この分布調査結果について早速日本道路公団に回答した。

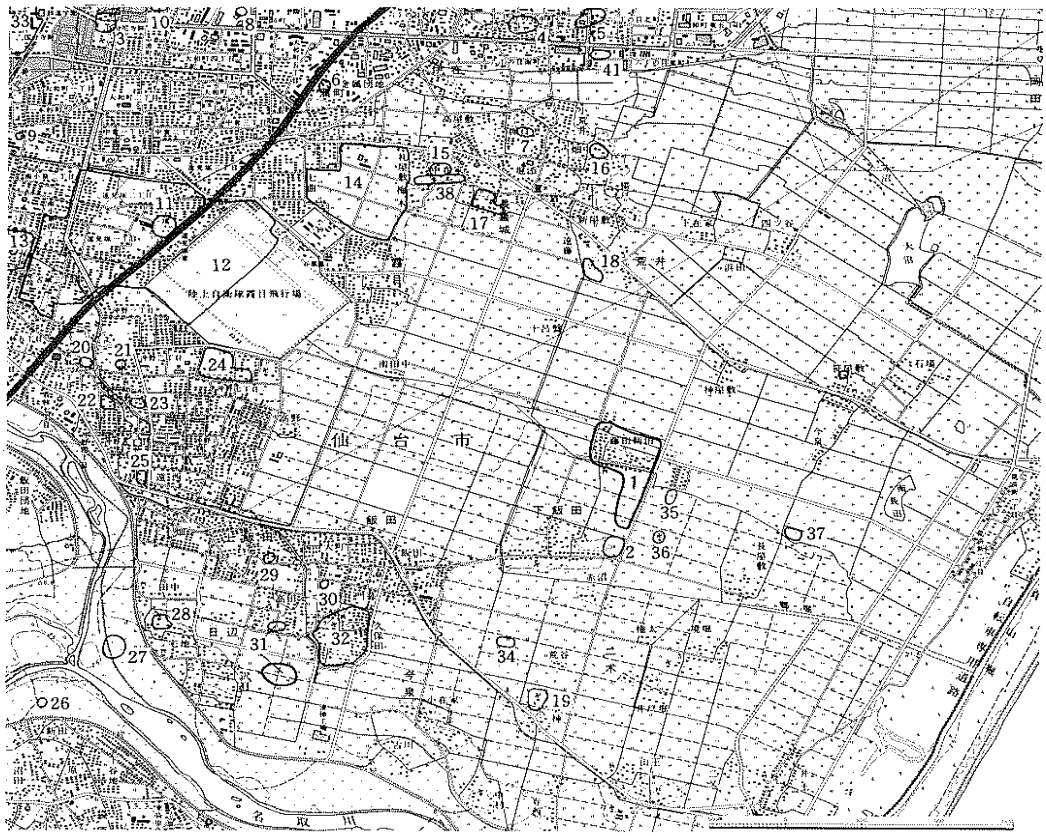
これらの地区のうち仙台市域分については、用地買収の完了を待って平成元年10月に県教育委員会が下在家地区から下飯田地区にかけて約３㎞ にわたるほぼ全線の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、下在家地区では遺構・遺物共に発見されなかったが、藤田新田地区と下飯田地区において古墳時代の竪穴住居跡や溝跡・土壙などが多数検出され、両地区とも浜堤上に立地する古墳時代の集落跡であることが判明した。路線敷にかかる面積は藤田新田遺跡が約24,400㎡、下飯田遺跡が約7,500㎡である。両遺跡の確認調査および事前調査については、県教育委員会と仙台市教育委員会が協議しながら協力してあたることになった。

今回の藤田新田遺跡の発掘調査は、以上の経過に基づき、県教育委員会が日本道路公団からの委託を受けて平成２年５月と10月に実施したものである。

Ⅱ．位置と環境

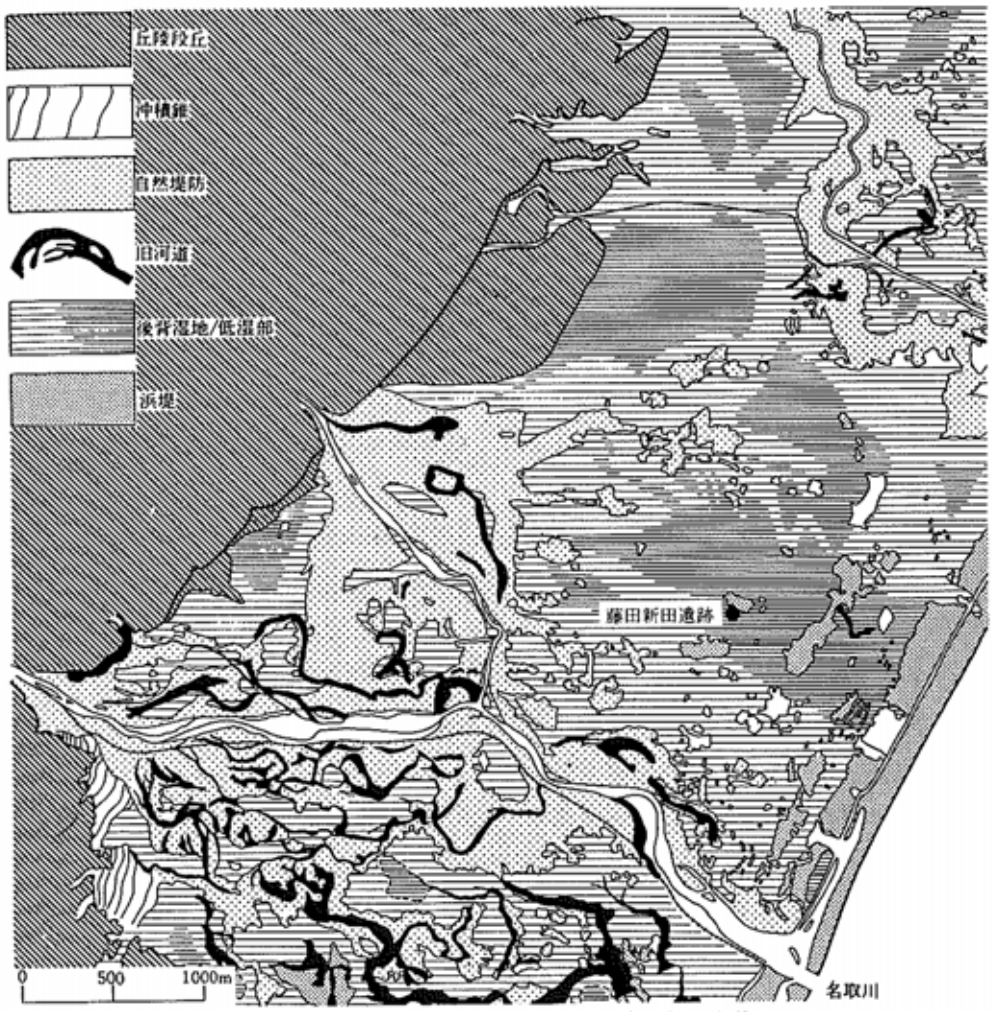
藤田新田遺跡は仙台市若林区荒井字藤田新田にあり、ＪＲ東北本線長町駅の東方約1.5㎞の地点に位置している。この地域は南北に仙台平野が広がり、東方は約３㎞で仙台湾に面した海岸に達し、西方は仙台市街地の背後に遠く蔵王連峰を望むことができる。標高は１m前後と低く、付近一帯は小規模な集落が散見する以外はおおむね水田地帯となっている。

仙台平野は地形的にみると市の東部付近において浜堤や自然堤防などの微高地が随所に発達している。松本秀明氏によれば、この地域は海岸線とほぼ平行して南北に延びる３本の浜堤列が認められ、形成年代は最も古い内側の列で約5000年前頃であるという（松本：1984)。それによれば、本遺跡は下在家－藤田新田－下飯田と連なる内側の列に該当することが明らかであるが、現状では耕地整理のため平坦化されており、旧地形を知ることはできない。本来は浜堤と後背湿地からなる地形に小さな旧河道が入り組むなど、変化に



第１図　遺跡と位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	藤田新田遺跡	浜堤	集落跡	弥生、古墳、平安	20	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
2	下飯田遺跡	浜堤	集落跡	古墳	21	神楯遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、古墳、古代
3	陸奥国分尼寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安	22	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
4	北屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安、中世	23	中楯西遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古墳、古代
5	明屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安	24	沖野城跡	自然堤防	城館	中世
6	曽利松明神古墳	沖積地	円墳	古墳	25	河原越遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
7	押口遺跡	沖積地	包含地	古代	26	大塚山古墳	河川敷	円墳	古墳
8	谷地館跡	自然堤防	城館	中世	27	日辺遺跡	河川敷	包含地	古墳（中）
9	法領塚古墳	自然堤防	円墳	古墳	28	日辺館跡	自然堤防	城館	室町
10	宝袋遺跡	沖積地	集落跡	古代	29	上屋敷遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
11	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳	30	小兜塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
12	南小泉遺跡	自然堤防	集落跡	弥生、古墳、奈良、平安	31	高田遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古代
13	若林遺跡	自然堤防	城館地	古墳、平安、中世、近世	32	今泉城跡	自然堤防	城館	中世
14	仙台東郊条里跡	沖積地	条里跡	奈良	33	陸奥国分寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安
15	中在家遺跡	自然堤防	包含地	平安	34	築道遺跡	沖積地	包含地	古代
16	荒井館跡	自然堤防	城館	中世	35	屋敷末遺跡	浜堤	包含地	古墳、古代
17	長喜城跡	自然堤防	城館	中世	36	下飯田薬師堂古墳	浜堤	円墳	古墳（後）
18	下荒井遺跡	自然堤防	包含地	平安	37	岡崎囲遺跡	浜堤	包含地	中世、近世
19	二木館跡	自然堤防	城館	安土桃山	38	中在南遺跡	旧河道	包含地	弥生、古墳



丹羽茂他（1981）より転載

第２図　周辺の地形分類図

富んだ地形環境にあったようである。なお本遺跡の時代である弥生～古墳時代の頃は、海岸線がかなり近く、遺跡の東方１㎞、すなわち現在よりも２㎞ ほど内側にあったと考えられている（松本：前掲）。

この浜堤上にある周辺の遺跡についてみると、現在のところ本遺跡のほか下飯田遺跡や屋敷末遺跡、下飯田薬師堂古墳など古墳時代の遺跡のほか築道遺跡や二木館跡などいくつかの古代～中世の遺跡がある。これらはいずれも弥生～古墳時代以降に属し、縄文時代以前のものは確認されていない。このことは前述したような立地基盤の形成年代が比較的新しいとされることに起因するものと思われ、この地域の歴史的背景を考える上で興味深い現象といえる。

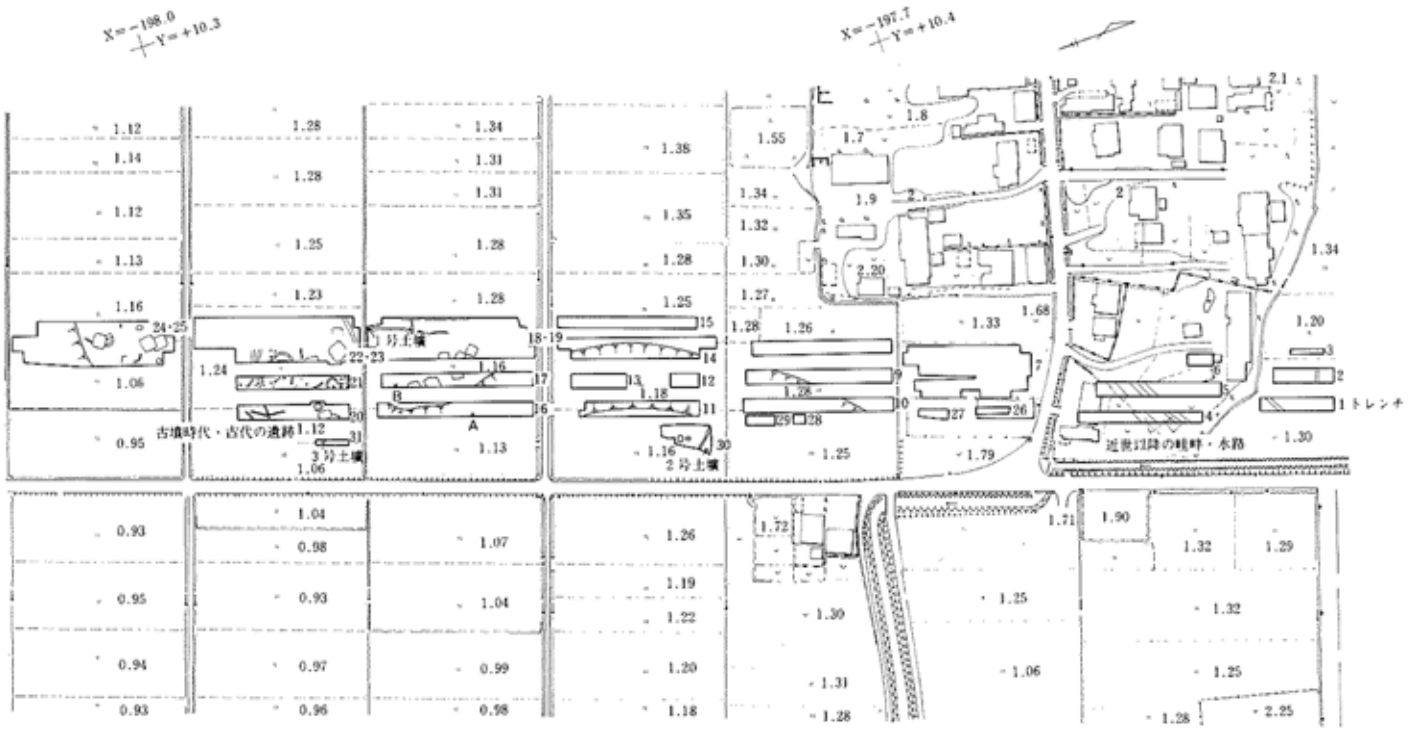
ところで、この地域の遺跡の数は仙台市内の他の地域と比較して必ずしも多くはないが、最近土木工事計画に関連して新たに発見されたり、範囲が大幅に広がったりするものなどがあり、漸次増加拡大の傾向にあることが指摘される。このことは、浜堤が南北に長く連なる地形状況との関係からみても予想されることであり、低湿地帯ということで、これまで遺跡の把握に十分とはいえなかった本遺跡周辺については、今後詳細な分布調査や確認調査によって、低湿地における遺跡の分布やあり方などを明らかにしてゆく必要があると考えられる。

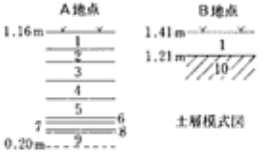
Ⅲ．調査の方法と経過

本調査は日本道路公団による仙台東道路建設計画が本遺跡と係りをもったため、その部分約30000㎡を対象に実施されることになった。その目的は主に道路敷内における遺構の有無やその範囲を調べるための確認調査である。

調査は平成２年５月７日に開始された。まず道路の中心杭のいくつかを基準としてグリッドを組み、中心線に沿わせた幅６m長さ50～60mのトレンチを24本設定し、北から南へ進む方向で確認調査が行った。その結果、６月１日までに調査区南半にある16～24トレンチを中心に竪穴住居跡17棟、掘立柱建物跡２棟、円形周溝５基、土壙多数、土器集中遺構１基などが検出された。その後６月４日からは主な遺構の内容を把握するために、竪穴住居跡２棟、円形周溝１基、土壙２基、土器集中遺構の精査を行ったが、砂地であることに加え、湧水が激しかったため調査は難行し、意図した十分な精査はできなかった。遺構の図面作成や写真撮影を完了し、一切の調査が終了したのは６月14日である。

なお検出された遺構のうち、精査を行ったものについては平面図面・断面図とも縮尺1/10～20、その他については１/200の平面図を作成し、また基本層位については層相に大きな変化がみられなかったため、主な地点の柱状断面図を作成するにとどめた。





層No	土　色	土 性	備　考	層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色（10YR3/2）	粘　土	水田耕作土	6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	灰白色火山灰
2	黒　色（10YR2/1）	粘　土		7	黒　色（10YR2/1）	粘　土	
3	黒　色（10YR2/1）	粘　土	2層よりやや明るい	8	黒褐色（10YR3/2）	砂	
4	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	粘　土	スクモを多く含む	9	黒　色（10YR2/1）	粘　土	
5	黒　色（10YR2/1）	粘　土	スクモを多く含む	10	黄褐色（10YR5/6）	砂	地山

第3図　調査トレンチと土層模式図

Ⅳ．調査の概要

調査の結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝、土壙、土器集中遺壙などが検出された。これらはすべて地山面で確認されている。なお調査区の基本層位は、遺構が検出された微高地部分では表土下 20ｃｍほどで砂質の地山面に達する。また湿地部分では表土下が、確認しただけでも２m以上の厚さで黒色～黒褐色のスクモを多く含む粘土層が堆積している(第３図)。以下、精査を行った竪穴住居跡２棟、円形周溝１基、土壙２基、土器集中遺構について説明を行うことにする。

第１号住居跡

【位置・確認面】第 22～23 トレンチの地山面で確認された。

【平面形・規模】ほぼ正方形を呈し、規模は一辺が約 5.8mである。

【堆積土】黒褐色の砂質土が堆積しており、若干の色調の違いから２枚の層に分かれる。第１層は第２層が低まった住居跡の中央に堆積し、第２層は壁や床を覆いながら全面に堆積している。

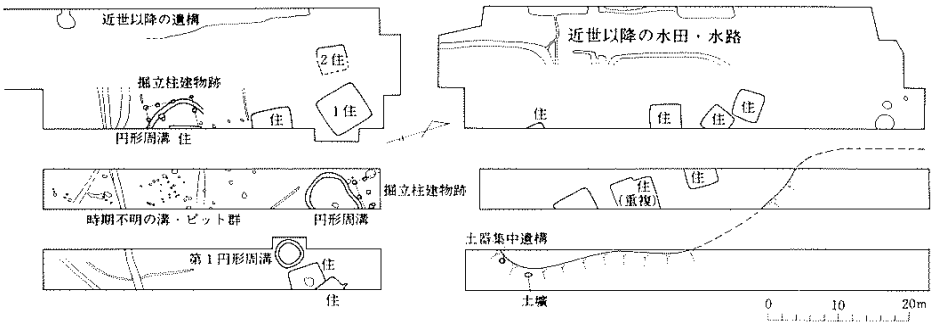
【壁】地山を壁としている。残存高は 20～25ｃｍで、立ち上がりは急角度である。

【床】平坦で、概ね地山を床とする。ただし住居跡の東辺から南辺にかけて地山質の第４層が分布しており、貼床の可能性も考えられた。

【柱穴】住居跡中央南東寄りと北東寄りで、径 30～40ｃｍの円形を基調としたピットが検出された。柱痕跡は確認出来なかったが、これらはともに住居跡の対角線上にあり、主柱穴の一つと考えられた。なお湧水が激しく掘り下げられなかったため、深さについては不明である。

【カマド】東辺中央南寄りにおいて確認された。暗褐色の粘土を用いて構築したものと思われるが、全体が崩壊しているため規模・構造とも不明である。

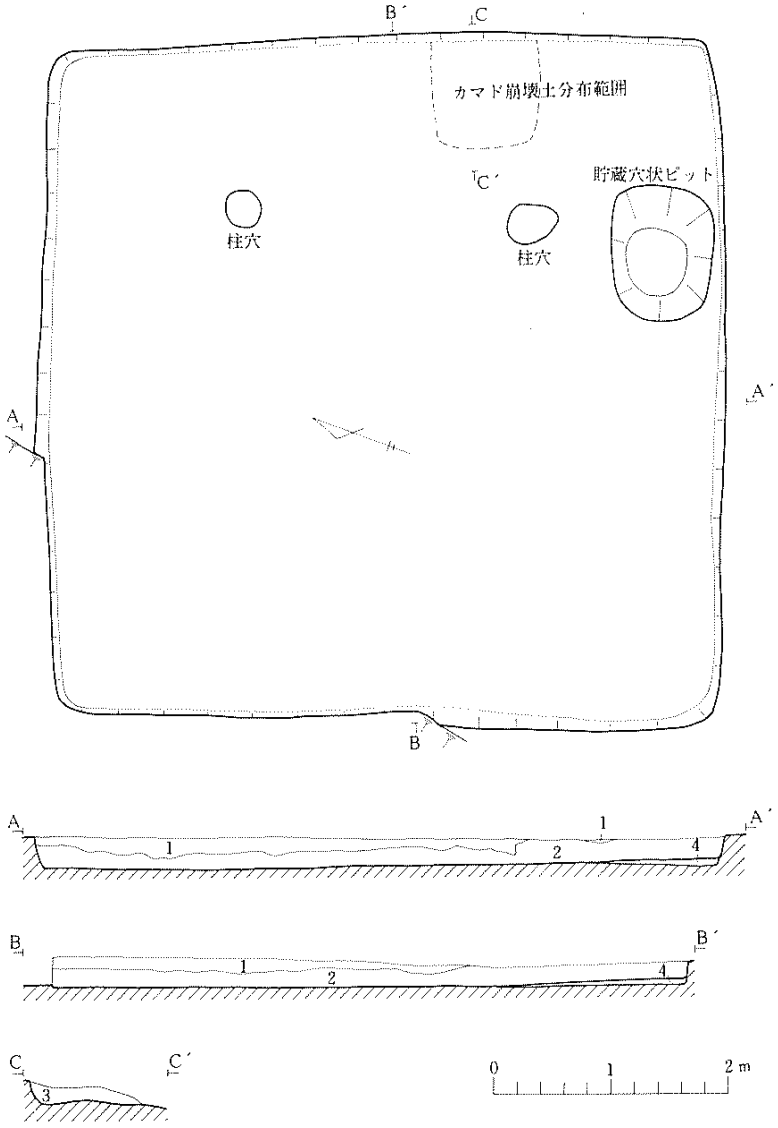
【貯蔵穴状ピット】南辺中央東寄りで検出された。平面は隅丸方形で、浅い皿状を呈する



第４図　遺構配図

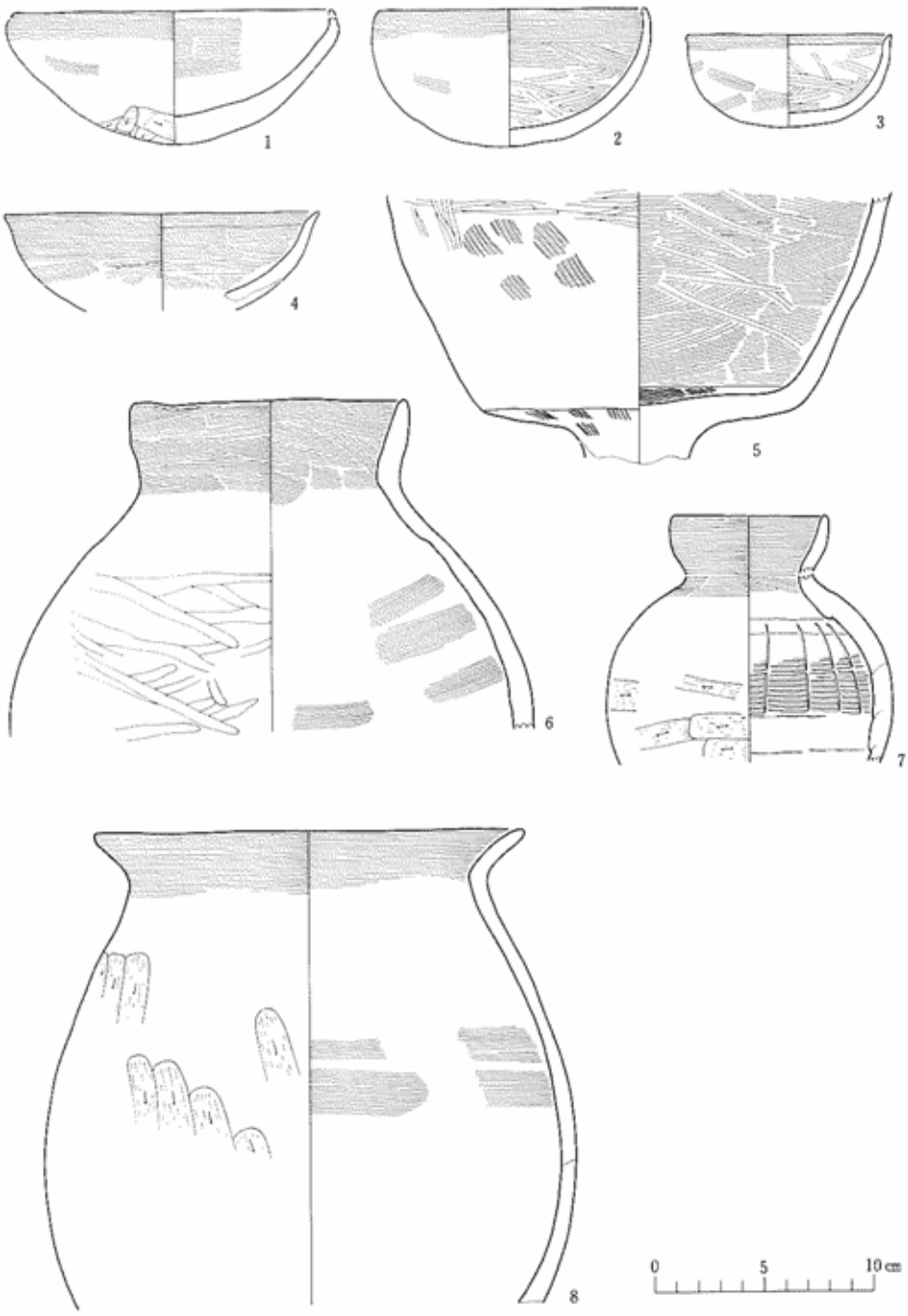
もので、土師器坏や甕などの伴出がみられる。

【出土遺物】床面、カマド、貯蔵穴状ピット、堆積土などから土師器坏、高坏、壷、甕が出土している。



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（10YR2/2）	砂	斑状に酸化鉄集積
2	黒褐色（10YR2/3）	砂	木炭含む。棒状に酸化鉄集積
3	暗褐色	粘土質シルト	カマド崩壊土
4	黒褐色（10YR2/3）	砂	2層よりやや明るい。住居掘り方埋土

第５図　１号住居跡



番号	層位	種類	特徴	登録	5	1住カマド	土師器高杯	外面：ミガキ・刷毛目、内面：ナデ・ミガキ・刷毛目	1住・15
1	1住貯	土師器坏	外面：横ナデ・ナデ・ケズリ、内面：横ナデ・ナデ	1住・5	6	1住貯	土師器壺	外面：横ナデ・ミガキ、内面：横ナデ・ナデ	1住12
2	1住貯	土師器坏	外面：横ナデ・ナデ、内面：横ナデ・ナデ・ミガキ	1住・4	7	1住カマド	土師器壺	外面：横ナデ・ケズリ、内面：横ナデ・刷毛目	1住8
3	1住2層	土師器坏	外面：横ナデ・ナデ、内面：横ナデ・ミガキ	1住・3	8	1住2層	土師器甕	外面：横ナデ・ケズリ、内面：横ナデ・ナデ	1住10
4	1住貯	土師器坏	外面：横ナデ・ナデ、内面：横ナデ・ナデ	1住・2					

第6図　第1号住居跡出土遺物（1）

番号	層位	種類	特徴	登録	3	1住2層	土師器甕	外面：刷毛目、内面：刷毛目	1住13
1	1住貯	土師器甕	外面：横ナデ・刷毛目、内面：刷毛目・ナデ	1住11	4	1住貯	土師器甕	外面：横ナデ・刷毛目・ケズリ、内面：刷毛目・ミガキ	1住14
2	1住2層	土師器甕	外面：横ナデ・ナデツケ、内面：横ナデ・ナデ	1住6					

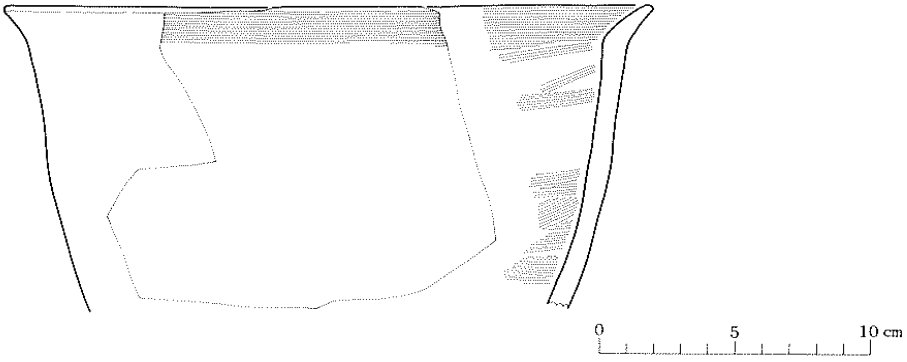
第７図　第１号住居跡出土遺物（2）

坏(第　図１～４)：全体形の明らかな１～３はいずれも丸底の坏である。このうち１は体部が直線的に外傾した後、上位で屈曲し、口縁部は短く内傾する。２は体部が丸みをもちながら外傾し口縁部に至るもので、口縁部ではやや内彎状になる。３も体部形態は同様であるが、口縁部において短く外反する。その際口縁部内面は削がれた状態になり、稜を形成する。４も同様の口縁形態をとるが、体部の丸みの度合はかなり弱い。底部は欠損しており不明である。器面調整については、いずれも外面の口縁部は横ナデ、体部はナデがみられ、さらに１では底部にヘラケズリが施されている。内面は口縁部がいずれも横ナデ、体部は１・４がナデ、２は上位がナデで下位がヘラミガキ、３はヘラミガキとなっている。

高坏（第　図５）：口縁部を欠いた大形高坏の坏部のみの破片である。底部は平底で、体部は下端で強く屈曲して外傾する。外面は口縁部付近にヘラミガキ、体部や底部には刷毛目がみられ、内面は体部がナデの後に雑なヘラミガキ、底部は刷毛目が施される。

壷(第　図６・７)：６は大形の壷である。体部は球形をなすものと推定され、頚部から口縁部にかけてはやや外傾する。口縁部内外面は雑な横ナデ、体部は外面がヘラミガキ、内面がナデとなっている。７は小形の壷である。体部は球形で、頚部は括れ口縁部はやや丸みをもって外傾する。口頚部内外面は横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面は刷毛目の調整が施されている。

甕(第　図７・第　図１～３)：７・１・２はいずれも体部中央が膨らみ、頚部が括れ、口縁部が外傾するものであるが、７・１では体部がやや長めであり、２ではほぼ球形である。３については上半を欠くが、上記二者のいずれかの器形になると思われる。器面調整をみると、７は口縁部内外面が横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はナデ、１は口縁部の外面が横ナデで内面は刷毛目、体部は外面が刷毛目で内面がナデとなり、２では口縁



番号	層　位	種　類	特　　徴	登　録
1	1住貯	土師器甕	外面：横ナデ、内面：横ナデ・ナデ	1住9

第８図　第１号住居跡出土遺物（3）

部内外面が横ナデ、体部内面がナデとなっている。さらに１・２では横ナデの後、頚部外面にそれぞれ刷毛目・ナデが縦方向に短く施されるのが特徴である。３は体部内外面とも刷毛目調整が主である。

甑(第　図４・第　図１)：４は無底式の甑であるが、１については不明である。ともに体部は幾分膨らみながら外傾し、口縁部はわずかに外反する。器面調整は、４の口縁部外面に横ナデ、内面には刷毛目がみられ、体部外面は刷毛目とヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。また１は口縁部内外面が横ナデ、体部内面がナデとなっている。

第２号住居跡

【位置・確認面】第22～23 トレンチの地山面で確認された。

【平面形・規模】東半分が失われているが、方形を基調とするのが明らかである。規模は西辺で約４ｍである。

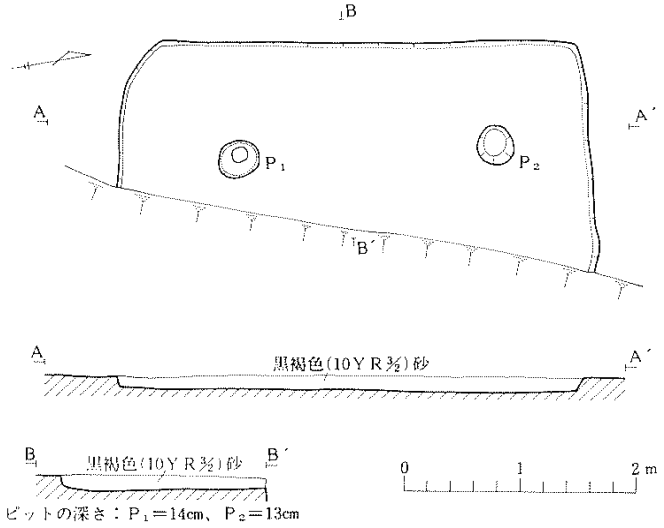
【堆積土】全面に黒褐色土の砂質土が堆積している。

【壁】地山を壁としている。残存高は約10㎝で、立ち上がりは急角度である。

【床】平坦であり、地山を床としている。

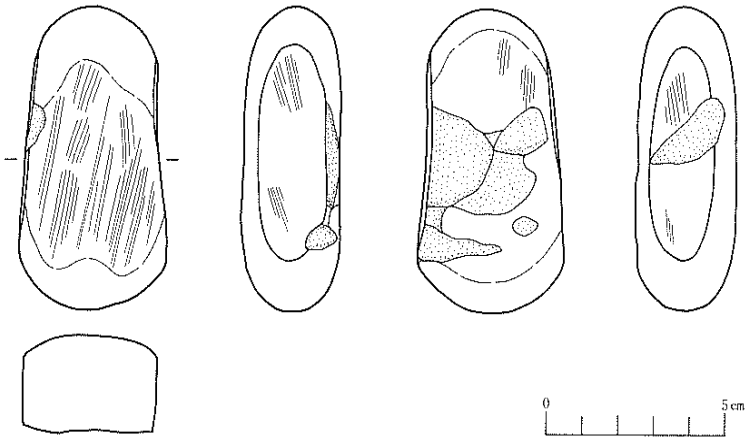
【柱穴】住居中央北西寄りと南西寄りで、径約30㎝、深さ約15㎝の円形のピットが検出された。このうちピット１では径 15㎝ の円形の柱痕跡が確認されている。これらはともに住居の対角線上にあり、主柱穴の一つと考えられた。

【出土遺物】床面や堆積土からロクロ不使用の土師器が少量出土しているが、細片で図示できるものはない。この他床面から砥石が出土している。



第９図　第２号住居跡

砥石(第　図)：平面は楕円形に近く、横断面は方形になるもので、長さは約８㎝、幅は約４㎝である。石材は凝灰岩であり、４面を使用している。



第10図　第２号住居跡出土遺物

第１号円形周溝

【位置・確認面】第20トレンチの地山面で確認された。

【形態・規模】円形に巡る溝で、断面は逆台形を呈する。幅は上端が約40㎝、下端が10～20㎝で、深さは30～40㎝である。この溝に囲まれた部分は、径約３ｍの円形の広がりをもつ。

【堆積土】砂質土が堆積しており、第１層－黒褐色、第２層－にぶい黄褐色の２枚の層に分かれる。

【出土遺物】堆積土からロクロ不使用土師器が少量出土している。細片のため図示できるものはない。

第１号土壙

【位置・確認面】第18～19トレンチの地山面で確認された。

【形態・規模】平面は円形、断面は半円形を呈する。規模は径80～90㎝、深さ50㎝である。

【堆積土】砂質土が堆積しており、第１層－黒褐色、第２層－褐灰の２枚の層に分かれる。

【出土遺物】堆積土からロクロ不使用の土師器が出土しているが、細片のため図示できるものはない。

第２号土壙

【位置・確認面】第30トレンチの地山面で確認された。

【形態・規模】平面は不整円形、断面は逆台形を呈する。規模は長短軸が100×75㎝、深さは約40㎝である。

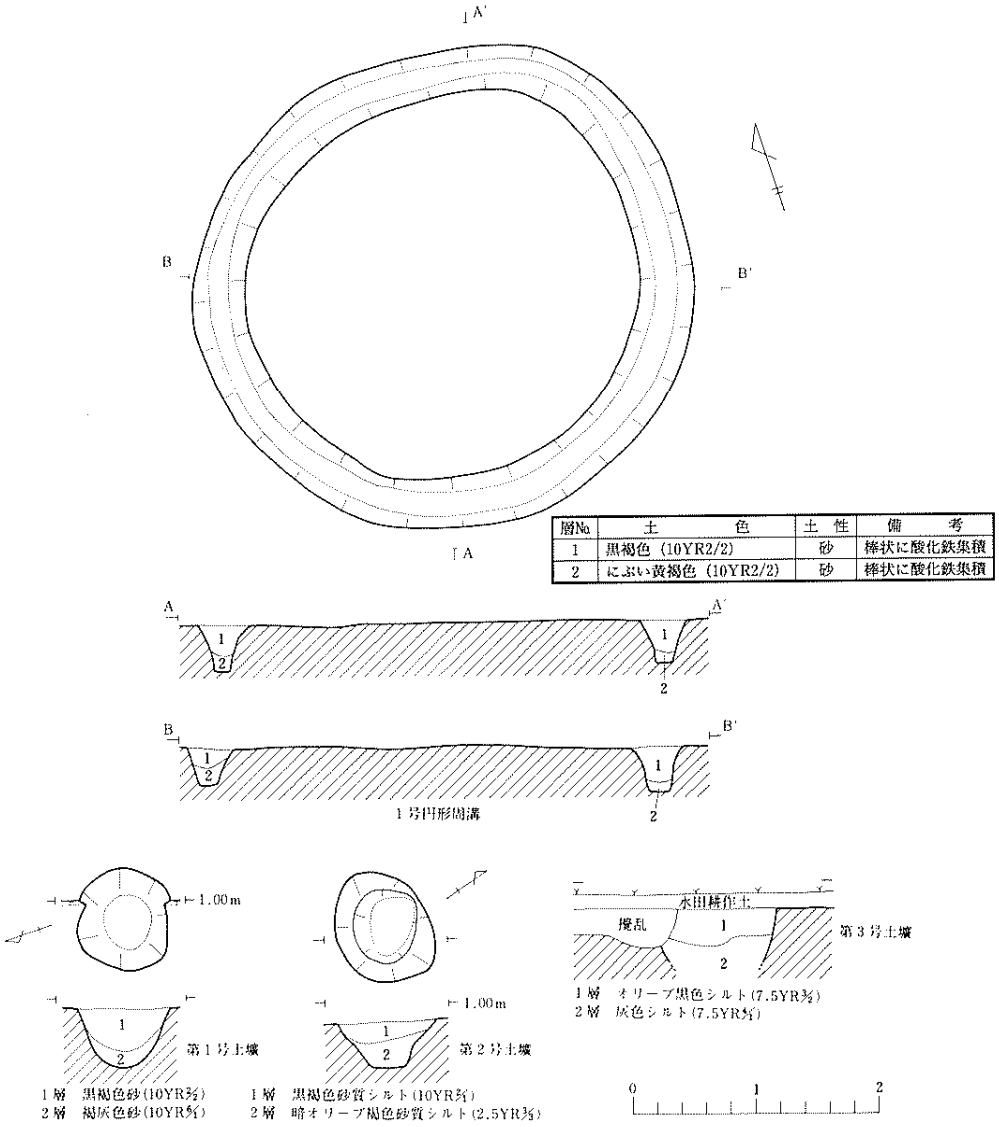
【堆積土】砂質土が堆積しており、第１層－黒褐色、第２層－暗オリーブ褐色の２枚の層に分かれる。

【出土遺物】堆積土からロクロ不使用の土師器が出土しているが、細片のため図示できない。

第３号土壙

【位置・確認面】第31トレンチの地山面で確認された。

【形態・規模】断面で確認したものであり、形態・規模は明確ではない。



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（10YR2/2）	砂	棒状に酸化鉄集積
2	にぶい黄褐色（10YR2/2）	砂	棒状に酸化鉄集積

第11図　第１号円形周溝・第１～３号土壙

【堆積土】砂質土が堆積しており、第１層－オリーブ黒色、第２層灰色の２枚の層に分かれる。

【出土遺物】土師器甕が１個体出土している。

甕(第13図３)：体部がやや長胴をなすもので、中央が膨らみ、頸部で括れ、口縁部が短く外反する。外面は口頸部が横ナデで、体部が刷毛目、内面は口縁部が横ナデ、頸部が刷毛目、体部がナデ調整されている。

第１号土器集中遺構

【位置・確認面】第16トレンチの地山上に堆積する黒褐色層面で確認された。

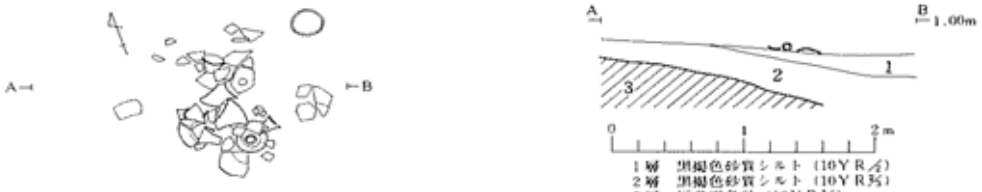
【形態・規模】掘り方はみられず、土器が1.5×1.5mの範囲のなかに不規則に重なり合う状態で検出された。ただし、土器のすぐ上を水田耕作土が覆っていることから、遺構の上半部が撹乱・削平を受け、原状を失っているものと思われる。

【出土遺物】細片を除くと、土師器高坏10点、坏２点、壷１点となっており、比較的高坏の多いのが目につく。

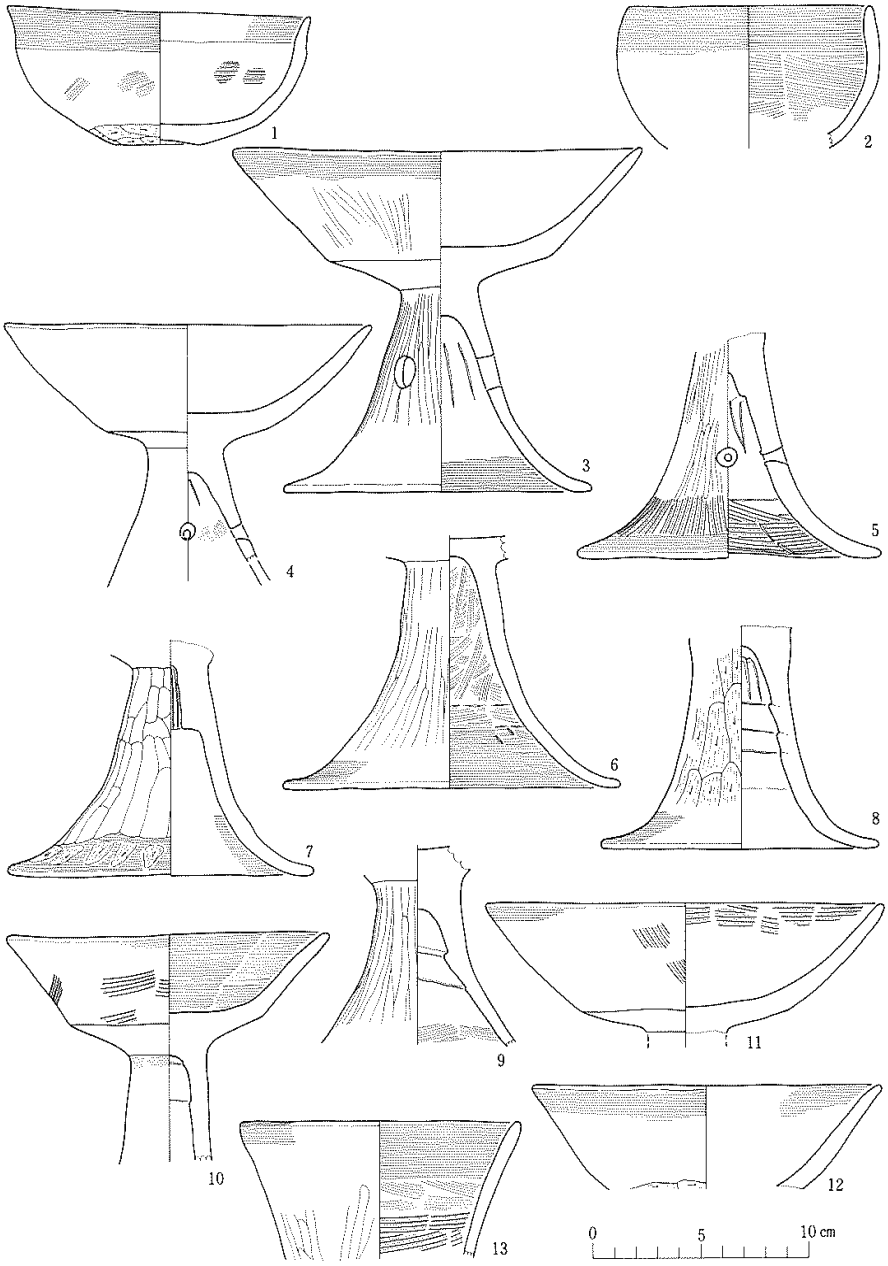
高坏(第13図３～12)：３・４は体部下端で強く屈曲し、体部～口縁部が外傾するもので、４ではそれがやや丸みをもってなされる。脚部はともに付け根から裾にかけて外反しながら開き、中位に１個の円窓をもつ。５～９は坏部を欠損するが、同様の脚部形態をもつもので、このうち５では中位に１個の円窓が穿たれる。器面調整をみると、坏部については３の口縁部外面が横ナデ、体部外面はヘラミガキが施される。４は全体が磨滅しており明確ではない。脚部の上～中位外面は３・５～７・９がヘラミガキ、８がヘラケズリとなっている。内面は概ねシボリ目のみが観察されるが、４の一部と６などナデ調整が施されるものもある。下位は内外面とも横ナデ調整である。

10は体部下端で強く屈曲し、体部～口縁部が外反気味になるもので、脚部は上～中位が中空の柱状をなす。坏部外面は口縁部が横ナデで、体部は刷毛目、内面は横ナデとなっており、脚部は摩滅が激しいが、外面の付け根付近にナデ調整がみられる。

11・12は坏部のみの資料である。11は４に類似する形態で、外面は口縁部・体部がそれぞれ横ナデ・刷毛目、内面の口縁部が刷毛目となっている。12も同様の形態と思われる。

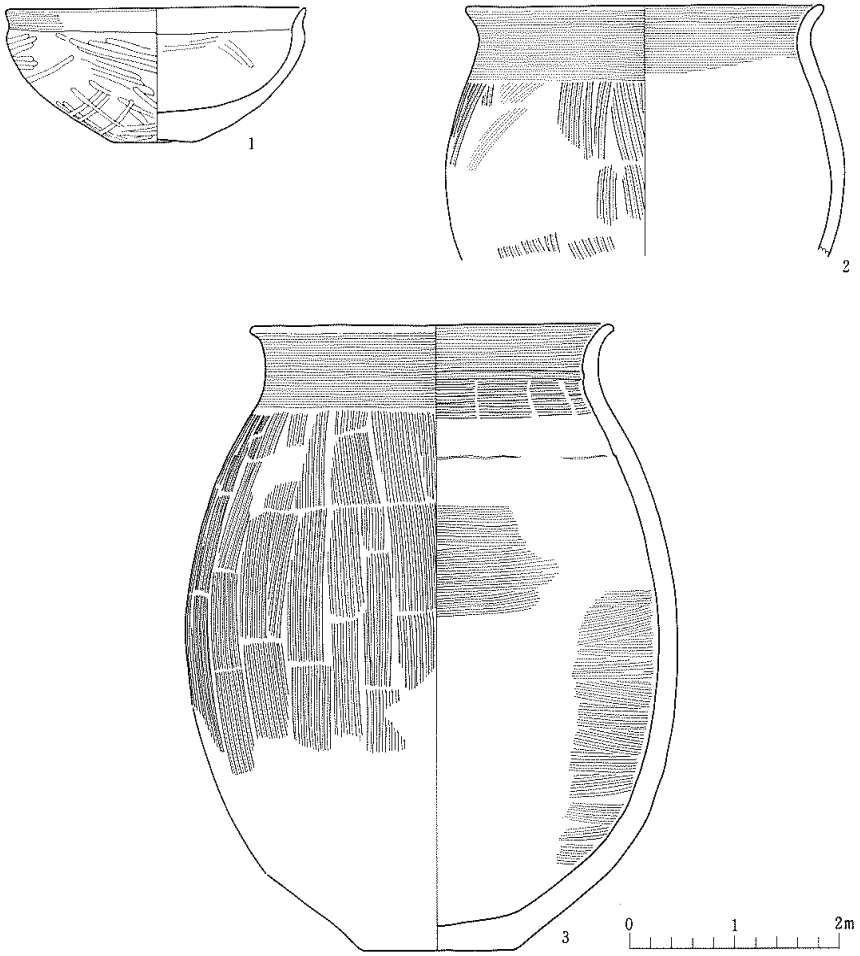


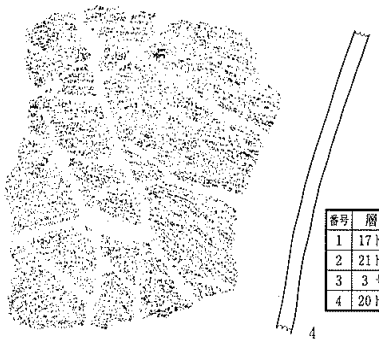
第12図　第１号土器集中遺構



番号	種　類	特　　徴	登　録	7	土師器高坏	外面：横ナデ・ミガキ・ケズリ、内面：横ナデ・ナデツケ	1集18
1	土師器坏	外面：横ナデ・ナデ・ケズリ、内面：横ナデ・刷毛目	1集27	8	土師器高坏	外面：横ナデ・ケズリ、内面：ナデツケ	1集19
2	土師器坏	外面：横ナデ、内面：横ナデ・ナデ	1集28	9	土師器高坏	外面：ミガキ、内面：ナデ	1集25
3	土師器高坏	外面：横ナデ・ミガキ、内面：横ナデ・ナデツケ	1集17	10	土師器高坏	外面：横ナデ・刷毛目・ナデ（ケズリ）、内面：横ナデ	1集20
4	土師器高坏	外面：不明、内面：ナデ・ナデツケ	1集24	11	土師器高坏	外面：横ナデ・刷毛目、内面：刷毛目	1集22
5	土師器高坏	外面：横ナデ・刷毛目・ミガキ、内面：刷毛目・ナデツケ	1集16	12	土師器高坏	外面：横ナデ・ケズリ、内面：横ナデ	1集23
6	土師器高坏	外面：横ナデ・ミガキ、内面：横ナデ・ミガキに近いナデ	1集21	13	土師器壺	外面：横ナデ・ミガキ、内面：横ナデ・ナデ・刷毛目	1集26

第13図　第1号土器集中遺構出土遺物





番号	層位	種類	特徴	登録
1	17トレンチ	土師器坏	外面：横ナデ・ミガキ、内面：(横ナデ)・ミガキ	堆 1
2	21トレンチ	土師器甕	外面：横ナデ・刷毛目・ナデ、内面：横ナデ	堆 7
3	3号土壙	土師器甕	外面：横ナデ・刷毛目、内面：横ナデ・刷毛目・ナデ	3土29
4	20トレンチ	弥生土器壺	外面：縄文LR、内面：ミガキ	堆 30

第14図　第3号土壙その他の出土遺物

口縁部内外面に横ナデ、体部外面下位にヘラケズリが施されている。

坏(第13図１・２)：1は平底で体部は丸みをもって外傾し、上位に弱い稜を形成した後、口縁部はやや外反する。内面の口縁下にも弱い稜がみられる。口縁部の内外面は横ナデ、体部の外面はナデと下端にヘラケズリ、内面には刷毛目が施されている。２は体部が丸みをもって外傾し、口縁部では内彎気味になる。底部は欠損しており不明である。口縁部内外面は横ナデ、体部内面はナデ調整となっている。

壷(第13図13)：やや外反気味に立ち上がる口頸部資料である。口縁部内外面は横ナデ、頸部は外面がヘラミガキ、内面は刷毛目となっている。

第３号土壙その他の出土遺物（第14図）

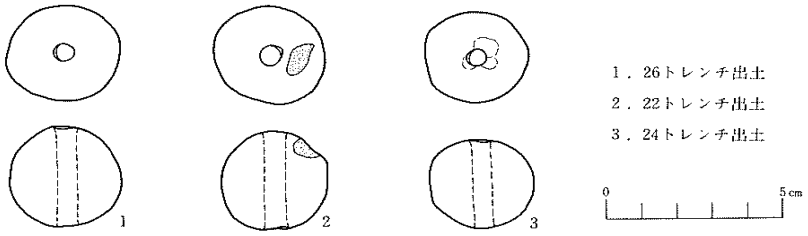
土壙や調査区内堆積層から土師器坏や甕、弥生土器などが出土している。

坏(第14図１)：平底のもので、体部は丸みをもって外傾し、上位で括れ、口縁部は短く外反する。口縁部は内外面に横ナデ、体部は内外面にヘラミガキが施されている。

甕（第14図２・３）：体部が膨らみ、頸部で括れ、口縁部が外反するもので、２は体部が球形であるが、３はやや長胴である。ともに口縁部内外面は横ナデ、体部外面は刷毛目が施される。

弥生土器(第14図４)：壷の体部破片と思われるものである。外面には多条の縄文(ＬＲ)が施されている。

土玉(第15図１～３)：いずれも径約３ｃｍの丸玉で、径５mmほどの貫通孔をもつ。表面は一部手づくね状の痕跡を残すが、概ね平滑に仕上げられている。



第15図　その他の出土遺物

Ⅴ．考　　察

（１）土器の年代

本遺跡の土器は出土状況から大きく第１号土器集中遺構出土土器と第１号住居跡出土土器の２つのグループに分けることができる。以下年代を考察するにあたっては、各々のグループごとに内容を検討する方向で進めてゆくことにし、それ以外の第３号土壙や堆積土から出土したものについては、個々単独でまとまりをもたないことから、その他の土器として別個に検討を加えることにする。

第１号土器集中遺構出土土器

第１号土器集中遺構からは土師器高坏・坏・壷などが出土している。これらは互いに重なり合うように１箇所にまとまった状態で検出されており、同一時期のものと考えられた。

このうち器形の明らかな高坏や坏について特徴をみると、高坏は脚部形態が付け根から裾にかけて外反しながら開くいわゆる円錐台状をなすもの（A類－13図3～9）と、中～上位が柱状のもの（B類－13図10）とがあり、B類の１点を除くとすべてA類となっている。またA類では１個の円窓をもつものがいくつかあるが、概ね小さく、形骸化した印象を受ける。坏部の形態はA・B両類とも体部下端が強く屈曲し、体部～口縁部が外傾する。器面調整は脚部外面はヘラミガキが主であるが、一部ヘラケズリが施されているものもある。坏部外面はヘラミガキ・ナデ・刷毛目、内面は横ナデもしくは刷毛目のいずれかとなっており、あまり統一性は認められない。

坏は体部が丸みをもって外傾したのち口縁部がやや外反するもの（A類－13図１）と、体部が丸みをもって外傾し口縁部が内彎気味になるもの（B類－13図２）とがある。A類は平底であるが、B類は不明である。ともに器面調整は内外面ともナデが主である。

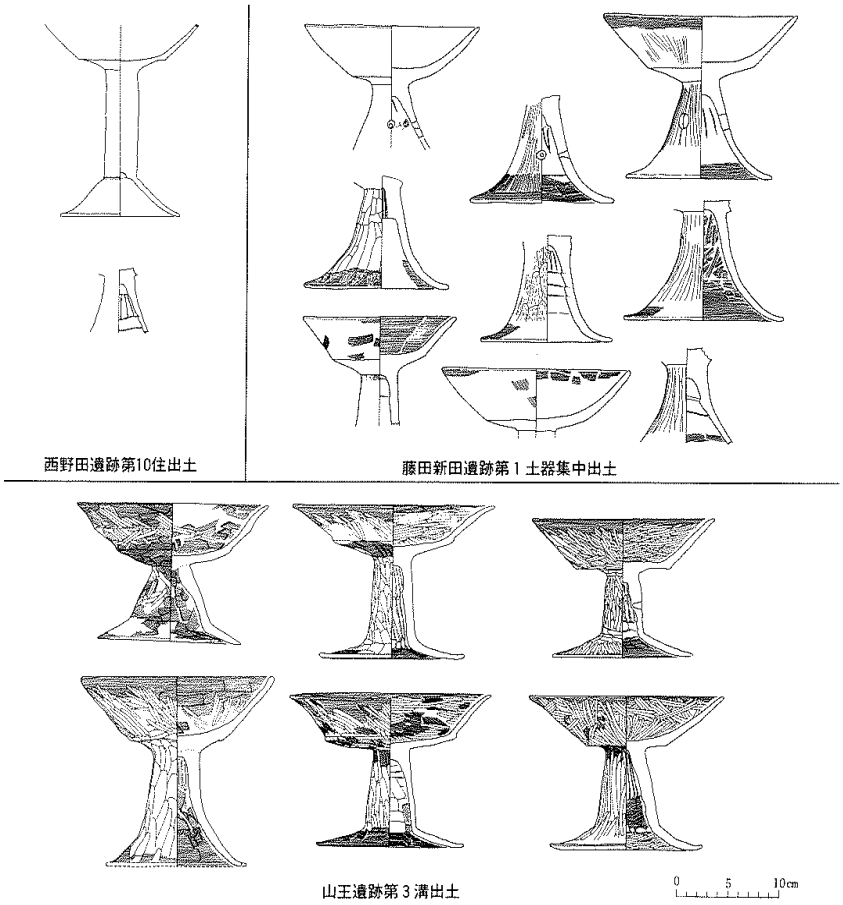
以上のような特徴をもつ本土器群のうち、その大部分を占め、端的に特徴を示すと思われる高坏について他の遺跡の出土例を求めると、比較的類似するものとしてまず第一に古墳時代中期南小泉式とされる多賀城市山王遺跡第３号溝出土土器の例（高倉：1981）があげられる。しかし同遺跡のものは坏部では本群に近い形態をもつが、脚部は上中位が柱状を呈し、下位が強く屈曲して開くものが中心となっており、本遺跡で多くを占める円錐台状をなすタイプはごく一部のものに限られている。この相違に関しては、脚部が屈曲する形態は南小泉式の典型であるのに対し、脚部が円錐台状をなすのは蔵王町大橋遺跡出土例(太田：1980)のように古墳時代前期塩釜式の特徴の一つとなっていることから、類似するとはいえ本群は山王遺跡のものより古い様相を示すものと考えることができる。それは塩釜式に盛行し山王遺跡段階で殆ど消失する脚部円窓が本群の一部に残ることからも裏付

けられよう。

そこで山王遺跡のものより古く、塩釜式期の資料のうち最も新しい段階（註１）とされる名取市清水遺跡第10号溝出土土器(丹羽他：1981)、同市西野田遺跡第10号住居跡出土土器（丹羽他：1974）などと比較すると、まず清水遺跡の例が最も近似する。しかしこの資料は確かに塩釜式の様相を示すものもある反面、甕や壷類のなかには明らかに南小泉土器と思われるものもいくつか含んでおり、伴出した高坏を塩釜式の一括土器として比較検討するにはやや問題がある(註２)。

したがって次に西野田遺跡の場合を比較してみると、次の二つのタイプの存在が認められる。すなわち一つは坏部の形態においては比較的類似するものの、脚部は上中位が中実で細長い柱状を呈し、下位が屈曲して開く形態であり、もう一つは坏部を欠き全体形は不明であるが、脚部は本群のような円錐台状なすものである。このことから推察すると、円錐台状のものが本群Ａ類と同じものとすれば、本群は西野田遺跡例と時間的接点をもつことが考えられる。しかしさして距離をおかない地域にありながら、本群では中実の柱状脚部をもつ高坏が全くみられないという組成の違いに注目した場合、むしろ両者は異なる時期の可能性が強い。これまでの出土例では脚部形態が中実で細長い柱状をなす高坏は、塩釜式には古川市留沼遺跡（手塚：1980）をはじめいくつかに認められるが、南小泉式では知られていない。したがって、それを含まず山王遺跡例の一部に共通点をもつ本群は、西野田遺跡のものより新しいと考えるのが妥当ではなかろうか。ただし坏部形態をみる限り前述したように類似性が強いことから、その時間差はさほどではなく、相近接する関係にあるのであろう。以上のことから西野田遺跡第10号住居跡出土土器群→本遺跡第１号土器集中遺構出土土器群→山王遺跡第３号溝出土土器群という変遷が想定される。

次に従来の土師器の型式との関係についてみると、上記の変遷から本群は塩釜式と南小泉式の中間的な位置にあることが明らかである。しかしいずれかに限定しようとする場合、高坏を主体とした器種に片寄りがある本群は、現段階では資料的に不十分といわざるをえない。加えて今回数量が少なく検討の対象にしえなかった坏においても、一方では山王遺跡のものに近い形態をもつが、他方では仙台市六反田遺跡第４号住居跡（佐藤：1987）から塩釜式後半のものと考えられている台付甕や壷、坩に伴って、本群坏Ａ類に極めて近い様相をもつものが出土している。このように異なる型式のなかで互いに共通性の強いものが存在するといった複雑な様相を示す塩釜式後半～南小泉式においては、安易な位置付けをさしひかえ、今後確実な資料の蓄積を待って内容を整理し、全体的な視点から再検討することにしたい。



第16図　西野田・藤田新田・山王各遺跡出土高坏

第１号住居跡出土土器

第１号住居跡出土土器には土師器坏、高坏、壷、甕、甑などがあり、これらは床面、貯蔵穴状ピット、堆積土２層から出土したものである。

各器種のうちまず坏の特徴をみると、口縁部形態が内傾するもの(Ａ類－6図1)、内彎するもの（Ｂ類－6図2)、外反するもの（Ｃ類）があり、Ｃ類ではさらに体部の丸味が強いもの（C1類－6図3）と弱いもの(C2類－6図4)に分かれる。器面調整は横ナデやナデが主であるが、体部内面にヘラミガキが施されるものもある。

高坏は坏部のみの断片資料で、体部下端が強く屈曲し、体部が変化なく外頃する深めのものである。外面にヘラミガキや刷毛目、内面にナデやヘラミガキが施されるが、かなり雑な印象を受ける。

壷は大形のもの（A類－6図6）と小形のもの(B類－6図7)とがある。ともに体部に比して口縁部が短いのが特徴である。器面調整は口縁部内外面が両者とも横ナデ、体部外面は前者がヘラミガキ、後者がヘラケズリなどとなっている。

甕は口縁部がいずれも「く」の字状に屈曲し外傾するもので、体部形態においてやや長めのもの（A類－6図8・7図1）と球形のもの（B類－7図2）とに分かれる。口縁部は内外面とも横ナデ調整が主であるが、一部に横ナデ風の刷毛目が施されるものもある。体部は刷毛目調整が目立つほか、第７図１・２など頚部外面に縦方向のナデや刷毛目が施されるのが特徴的である。

甑は口縁部でわずかに屈曲し外傾する深鉢状をなす無底式のものである。調整が明確なものでは口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛目、体部は外面が刷毛目やヘラケズリが施され、内面はヘラミガキとなっている。

これらの土器を出土層位からみた場合、その大半を占める床面、貯蔵穴状ピットから出土したものは住居廃絶時のものと考えられ、同一時期の一括資料であることが明らかである。また堆積土から出土した坏C1類・甕B類についても、かなり床面近くから出土し、かつその特徴は上記の一括資料とさして異なるものではないことから、それに準じた時間的にほぼまとまった資料として把握した。

本土器群の編年的位置付けについては、その特徴から古墳時代中期南小泉式に属すると考えられるが、近年さらに同型式が２～３段階に細分されているのを踏まえれば次のようになる(丹羽：1983・加藤：1989)。すなわち同型式に属するもののうち、古い段階とされる山王遺跡第３号溝出土土器（前掲）と、それに後続する段階とされる仙台市鴻ノ巣遺跡第１号住居跡出土土器（白鳥・加藤他：1974）を対象に比較を行ってみると、坏については本群A 類は両遺跡のものに、 C1類などは山王遺跡のものに共通するなどどちらにも含めうるが、甕についてみる限りA類としたものに長胴の傾向がみられることや、甑に類似した形態のものがあること（註３）などからやや鴻ノ巣遺跡のものに近い様相がうかがえ、その点で本群は同遺跡段階に位置付けられる可能性がある。

その他の土器

その他として第３号土壙から土師器甕が、調査区内堆積層から土師器坏、甕、弥生土器などが出土している。このうち坏については鴻ノ巣遺跡（前掲）に、甕は南小泉遺跡第14次調査（佐藤：1987）などに類例があり、いずれも南小泉式のものと考えられていることから、恐らく同時期に属するものであろう。弥生土器については破片資料のため、その時期は明確でない。

（２）遺構の年代

本遺跡からは竪穴住居跡17棟、掘立柱建物跡２棟、円形周溝５基、土器集中遺構１基、土壙などが検出されている。このうち年代の明らかなものは精査を行ったうちのいくつかである。すなわち出土土器の年代から第１号土器集中遺構は古墳時代の塩釜式～南小泉式期に、第１号住居跡、第３号土壙は南小泉式期に位置付けることができる。その他精査を行った第２号住居跡、第１号円形周溝、第1・2号土壙については、出土土器が破片であるため明確ではないが、その特徴からおおよそ塩釜式～南小泉式頃のものと推定される。また精査を行わなかった遺構については不明であるが、遺構周辺の堆積層から出土した土器の内容から古墳時代を中心とした時期のものと思われ、他に弥生時代、平安時代のものも存在する可能性が考えられた。

註１　丹羽氏は塩釜式の土器を４段階に細分し、清水遺跡第10号溝出土土器や西野田遺跡第10号住居跡出土土器を同型式の最も新しい段階に位置付けている(1985)。

註２　清水遺跡第10号溝出土土器には南小泉式である本遺跡第１号住居跡出土土器（第６図６・第７図１）に類似したものが含まれている。

註３　本群の甑（第７図４）が鴻ノ巣遺跡で甕ＣⅢ類とされているものに類似している。この甕ＣⅢ類はその形態から甑の可能性がある。

Ⅵ. ま　と　め

１．藤田新田遺跡は仙台市若林区荒井にあり、仙台市東部の沖積地に形成された浜堤上に立地している。

２．仙台東道路建設計画に伴う確認調査の結果、古墳時代～古代の竪穴住居跡17 棟、掘立柱建物跡２棟、円形周溝５基、土器集中遺構１基などが検出された。このうちいくつかについて精査を行い、第１号土器集中遺構から古墳時代前期～中期の、第１号住居跡からは古墳時代中期の良好な土器資料を得ることができた。この他、調査区内の堆積層から弥生土器が出土しており、該期の遺構が存在する可能性も考えられた。

<引用・参考文献>

阿部・須田・岩見(1991)：「新峯崎遺跡」『宮城県村田町文化財調査報告書』第９集
村田町教育委員会

伊東信雄(1957)：「古代史」『宮城県史』第１巻

氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯東北史学会

太田昭夫(1980)：「大橋遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集
宮城県教育委員会

加藤道男(1989)：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

兼田芳宏(1987)：「宮城県仙台市南小泉遺跡」『埋蔵文化財発掘調査研究所報告書』第４集
南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所

日下部善己他(1980)：「付編　矢ノ目遺跡出土遺物－祭祀遺物－（伊達西部地区遺跡所収)」
『福島県文化財調査報告書』第82集　福島県教育委員会

佐藤　洋(1987)：「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第102集　仙台市教育委員会

佐藤　洋(1987)：「南小泉遺跡－第14次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第109集
仙台市教育委員会

佐藤・菅原他(1991)：「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第141集　宮城県教育委員会

白鳥・加藤他(1974)：「岩切鴻ノ巣遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』
第35集　宮城県教育委員会

高倉敏明他(1981)：「山王遺跡－山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第２集
多賀城市教育委員会

手塚　均(1980)：「留沼遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集
宮城県教育委員会

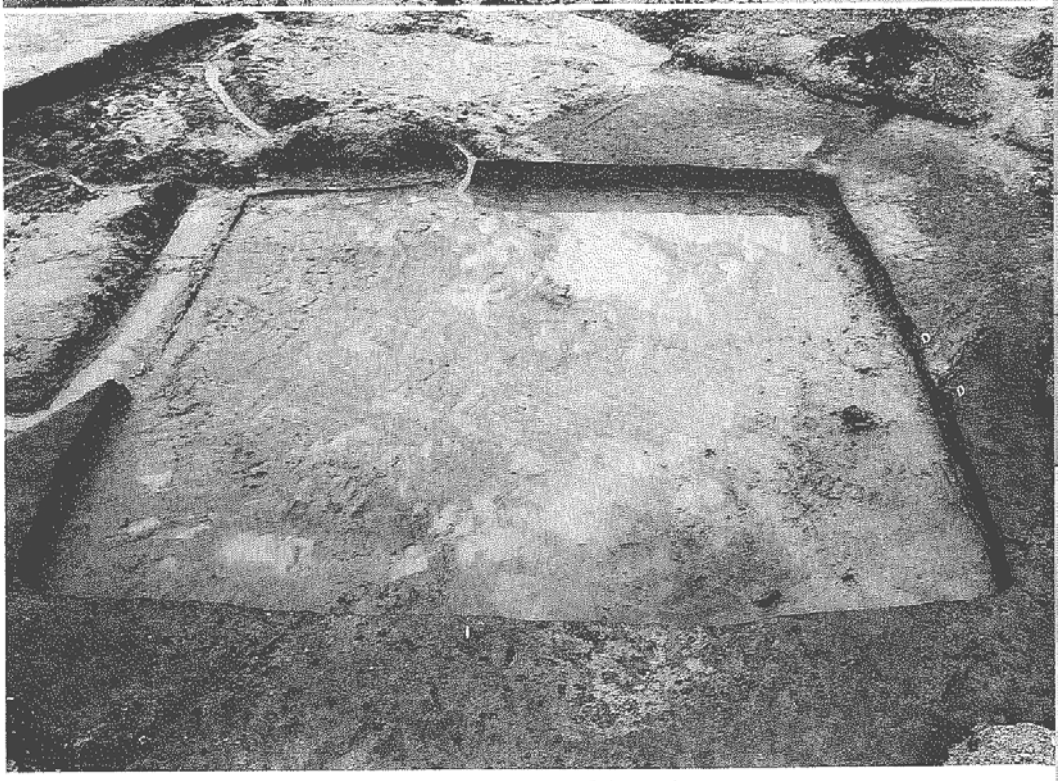
丹羽・柳田・阿部(1974)：「西野田遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』.
第35集　宮城県教育委員会

丹羽・阿部・小野寺（1981）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』
第77集　宮城県教育委員会

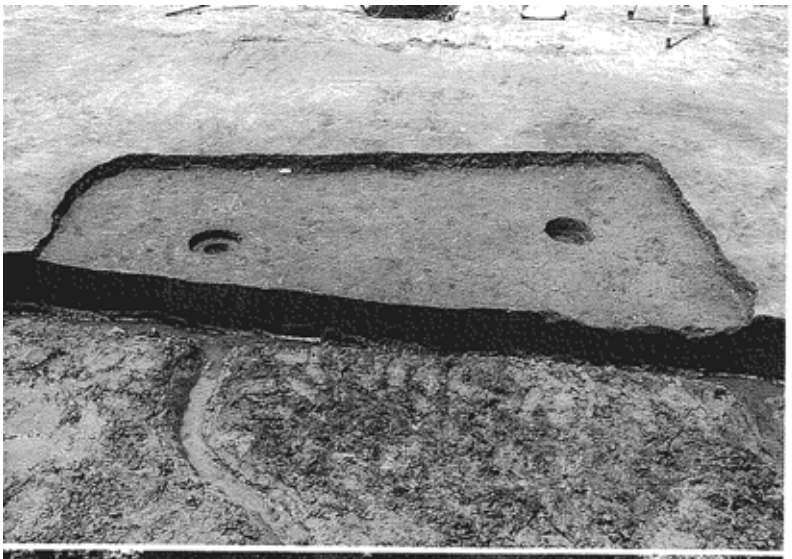
丹羽　茂(1983)：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集　宮城県教育委員会

松本秀明(1984)：「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城の研究－考古学篇』

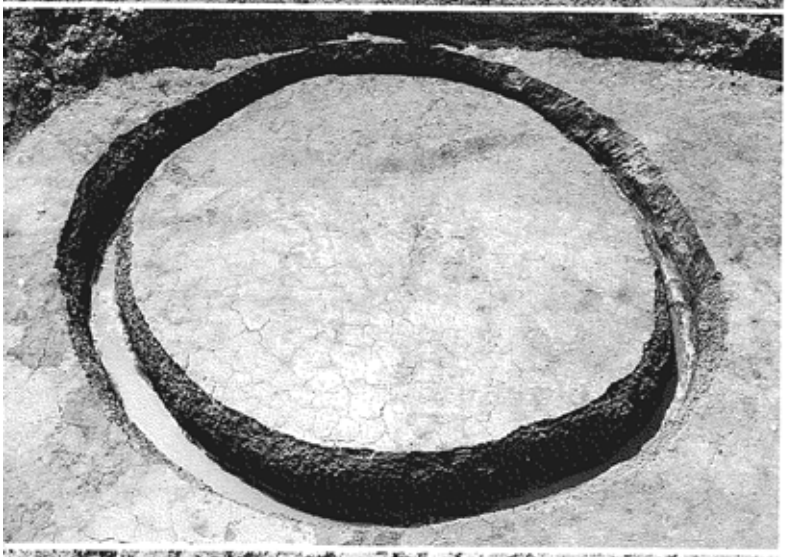
写　真　図　版



図版１　上：遺跡遠景（南より）
下：第１号住居跡



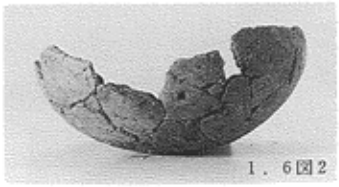
第２号住居跡



第１号円形周溝

第１号土器集中遺構

図版２

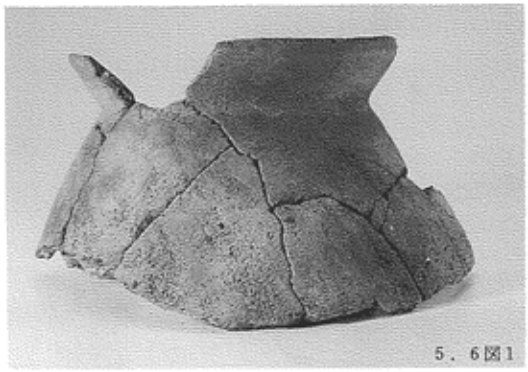


1．6図2

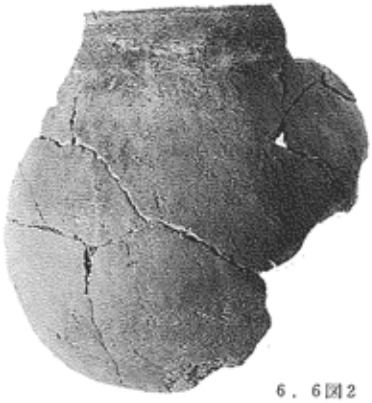
2．6図5

3．6図6

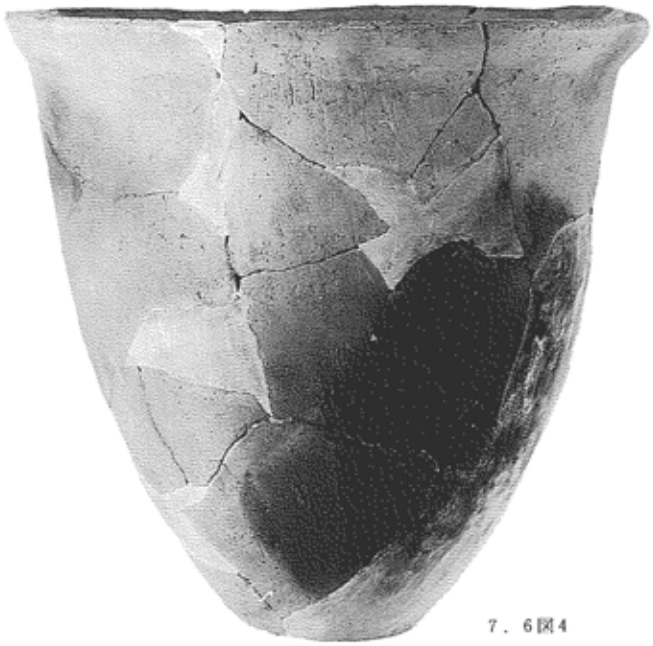
4．6図7



5．6図1

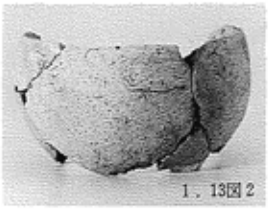


6．6図2



7．6図4

図版3　第1号住居跡出土遺物


1．13図2

2．13図1

3．13図3

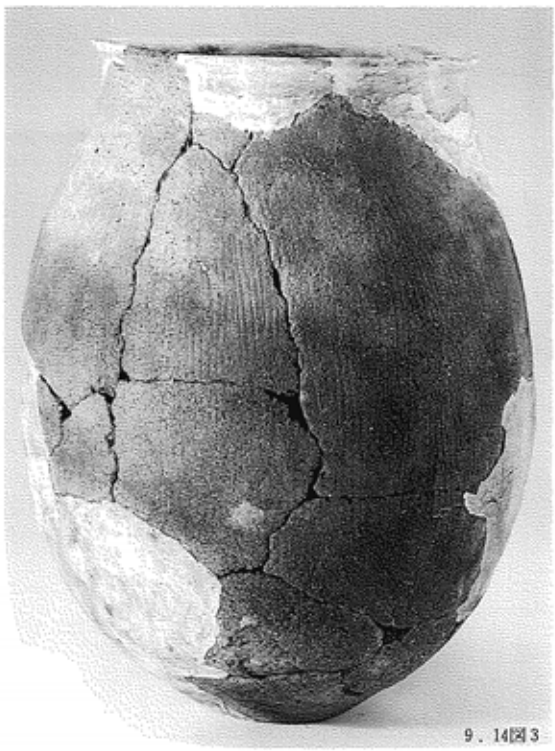
4．13図4

5．13図5

6．13図6

7．13図7

8．13図10


9．14図3

10．10図

11．15図1

12．15図2

図版4　第1号土器集中遺構その他の出土遺物